



TITLE:

<研究論文>死の実存的意味を捉える
アプローチを巡って:ナラティブ
・アプローチの射程

AUTHOR(S):

川島, 大輔

CITATION:

川島, 大輔. <研究論文>死の実存的意味を捉えるアプローチを巡って:
ナラティブ・アプローチの射程. 教育方法の探究 2003, 6: 62-68

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190276>

RIGHT:

死の実存的意味を捉えるアプローチを巡って

—— ナラティブ・アプローチの射程 ——

川 島 大 輔

1. はじめに

人間の生きる意味とは何であろうか。死の意味するものは何であろうか。我々人間はどこから来て、そしてどこへ行くのか。

これらの問いは、これまで多くの哲学者や思想家達が、常に人間の根本的問題として取り組んできたものである。このような意味への問いかけは長い間心理学の領域に於いては、臨床の分野を除いて、非科学的なものとして退けられてきた (Crossley 2000)。しかし近年、この問いは改めて心理学の主題として取り上げられようとしている。そして人間の実存からかけ離れ、単なる変数として処理されてきたことで失われてきた、人間存在の豊かさと十全さを取り戻そうとする研究者の志向性は、特に、人間の生活に於ける移行や発達の現象の研究に於いて顕著に現れてきている (Josselson 1993)。

この流れは必然といえる。何故ならば、人間は、例えば行動主義的心理学者が我々を意味づける為の彼らの理論的、方法論的意図を型にする際の、自然科学的調査の対象のようなものではなく、人間存在として、本質的に解釈学的創造物である為である (Crossley 2000: 10)。従って人間行動の研究は、人間経験を形作る意味の形態についての探索を含んだものでなければならぬ (Polkinghorne 1988: 1)。

更に人間存在は生物学的、社会的構造、あるいは文化的な影響を免れることは出来ない一方で、その文脈に於いて、自らの存在の統合的な部分として、意味を創造することに従事する (Kenyon 1999: 11)。つまり、我々の経験は意味に満ちたものであり、人間の行動も又、意味に満ちたもの

によって特徴付けられ、かつ生み出されるのである。即ち、我々は実存的意味に対する必要な条件を構成する存在、つまり意味を求める存在なのである (Kenyon 1999: 7)。

このような意味への志向性は、人間存在にとって根源的なものである一方で、生命を脅かすような病気や慢性疾患に直面した人間、つまり自らの根源的価値を揺さぶられる経験をした人間にとっては特に顕著に現れてくるものである。即ち、我々は死に直面することで、それまで自らが保持してきた自己自身あるいは自己の世界に対する基本的な存在論的前提を打ち碎かれる為に、生と死の実存的意味を見出そうとするのである (eg. Crossley 1997, 1998, 1999)。

そこで、本稿では意味、特に死の意味についての実存主義的アプローチと、生涯発達のアプローチの特徴及び問題点を挙げ、それを繋ぐものとしてナラティブ・アプローチに注目したい。

2. 実存主義的アプローチ

多くの実存主義者たちは、人生の有限性、つまり我々が死に逝く存在であるという事実への自覚が、その唯一の価値と意味の正しい認識の必須条件を構成することを著わしてきた。例えば、Sartre (1947) は、人間の有限性は彼らの自由と個性にとって必要な条件であると述べ、また Van den Berg (1972) は、死は生命の質であり、その人生の質も又、人間存在の価値の指標であると述べている。特に、死の実存的意味に対する深い思索を行った Heidegger (1962) は、その古典的研究である『存在と時間』に於いて、「死に向

かう存在」を可能にしながら、どのように死の予測がその世界に於ける根源的世界に向かって苦悩を引き起こすのかを探求し、死の予期は十全たる存在の発達と真の存在の為の状況を生み出すとしている（Crossley 2000：143-44）。

心理学における実存主義的アプローチの具体的研究として、例えば Ranst & Marcoen（1999）は、人生の意味や心理学的幸福感が死に対する三つの態度の型、即ち、ただ死を人生の不可変の事実として受け入れる「中立的受容」、死後の幸福な世界への信念を含んだ「接近受容」、そして、死を苦難に満ちた人生からの開放の手段とする「逃避受容」の三つの態度と密接に関わっていることを示した上で、個人が人生を眺める方法が死への態度に影響を及ぼすと同時に、人々が死を眺める方法もまた、彼らがどのように人生を見つめるかに影響を及ぼすと述べている（Ranst & Marcoen 1999：67-9）。

また Coward（1999）は、人生を脅かす病気は危機であると同時に、意味の構築の為の機会でもあることを述べた上で、AIDS や乳癌のような疾病を持った人間が、自己超越に対する人間の可能性を通じて、意味を発見あるいは構築する方法を探究している。

このように、実存の意味に対するアプローチは、死と時間、つまり人間の有限性をその主題としてきたといえよう（Kenyon 1999：7）。つまり、人間の人生は、死の包含なしには完結することが出来ないものであり（Kenyon 1999：16）、死の意味づけという行為もまた、本質的で根本的な人間の過程であるといえよう。

ここで、意味の二つの側面に触れておくことが重要であろう。即ち、意味の構成は二つの異なった、しかし相互に関係した側面によって概念化することが可能である。つまり、一方は間接的で定義的な意味、つまり経験に対する意味である。従って、人生の意味という用語は、ここではライフイベントや人生一般についての解釈に対し言及したものである。そしてもう一方は、実存の意味あるいは意味に満ちたもの、つまり意味の経験と呼ぶ

ことが出来よう。即ち、この人生の意味は、ここではライフイベントや誰かの人生について誰かが抱いている目標や動機に対し言及したものである。しかし、この意味づけの意思と、意味を求める意思は実存の意味の生成に於いて核となるプロセスであり、どちらも人間経験の豊かな理解に於いて重要な構成要素である（Reker & Chamberlain 1999a：1／Dittmann-Kohli & Westerhof 1999：107）。

この意味の二つの側面を考慮すると、死の意味もまた、様々な経験を通して組織化される意味の統合体として存在する一方で、日々生成されるものであるといえる。つまり、存在論的価値を揺さぶられることで触発され、活発化する実存の意味への志向性もまた、日常の生活に於ける様々な経験の意味に影響され、その結果見出される実存の意味もまた、個々の出来事の意味によって変容する。逆に実存の意味もまた、その意味を求める意思により、日常的経験の意味に影響を及ぼすのである。

このように意味の豊かさを掬いえた実存主義的アプローチも幾つかの決定的な問題点を孕んでいる。即ち、現実主義的視点に陥り易く、生涯発達の視点を考慮してこなかった点である。

実存の意味へのアプローチは、それまで矮小化されてきた主体の復権であり、その結果として常に個人の経験としての側面を強調してきたといえよう。しかし、如何なる意義や意味、あるいは出来事に帰した価値も、我々の関心や偏見、そして興味によってそれらの上に投げかけられたものであり、出来事それ自体に触れることは不可能である（Carr 1986：19）。従って、我々はある経験の意味、あるいは意味の経験を描こうとした場合、それらが物理的現実の世界を映し出したものでなければ、語られた意味もまた、その個人の生きた経験を完全に描写したしたものでもないという制約に気づかなければならない。つまり、言語的な反応として個人が述べたことと、認知あるいは経験として個人が彼ら自身や世界に対しどのように感じ、思考しているかを簡単に結びつける現実主

義的なアプローチは、彼らが提示する意味への無批判な受け入れを招き、その結果、個人的な、個々の経験の社会的構造についての十分な説明を見逃してしまう危険性がある（Crossley 2000：34-7）。

更に、発達的に重要な過程として実存的意味の生成に於ける広域にわたる理解があるにも拘らず、現存の理論的アプローチは、老年期のような特定の人生段階と実存的意味のプロセスを関連付けようとした幾らかの努力はあったにせよ、発達の論点を取り入れるようとはしてこなかった（Reker & Chamberlain 1999b：201）。しかし、この実存的意味も固定的で、普遍的なものでは決してなく、意味は個人的なものであり、構成されるとともに常に変化するものである。つまり、実存的意味の達成は、人生に亘る課題を構成するのである。

異なった人生段階および段階間の移行点に於ける実存的意味は、人生生涯にわたる最良の人間発達について、我々に多くのことを語ってくれる。何故なら意味への意思は人生生涯に於ける連続した過程であり、状況の変化や価値の志向の転換、あるいは更新された野心によって引き起こされるものであり、意味の主題や源泉は人生生涯にわたり変化する一方で、同一性を維持し、一貫性の感覚を促すなかで、その意味への意思の中心的特長は不変であるからである。（Reker & Chamberlain 1999a：2）。

従って、実存的意味の探求は本質的に、意味が人生生涯にわたり変化するという見方、つまり生涯発達の視点で捉える必要性を有しているといえる。

次に生涯発達の理論家たちが、どのようにこの問題について取り組んできたかを概観してみる。

3. 生涯発達のアプローチ

3-1. 死の見方の発達

生涯発達の研究者、特に人格発達の研究者たちは、老年期という発達段階に於いて特に死の意味を扱っているが、確かに死は老年期のみに見られるものではなく、どの発達段階に於いても起こり

うる出来事である。即ち死は我々に平等に訪れる。それは子どものときであるかも知れないし、青年期あるいは中年期であるかも知れない。ではなぜ、多くの生涯発達の研究者たちは老年期という発達段階に於いて死と向き合う意味を問うているのであろうか。

それは老年期には他のどの時期よりも死の近づきを感じやすい為であろう。これは死に対する態度の違いからも理解することが可能である。即ち、Newman & Newman によると、死に対する見方の発達は、子どもの頃より始まり、成人後期に至るまでは完全に解決されない連続した過程である。つまり、自己自身の死についての考えは、個人的同一性を形成する過程に於いて、死ぬ運命、人生の意味、死後の生命の可能性について疑問をもつようになることで、形成され始めるが、老年期に至るまでは、統合された同一性を確立していない為に、あまり現実的でなく強調されることもない。そして両親や年長の親戚の死を通じ、ますます死という現象に対して現実的に捉えるようになる成人中期に於いて、「生成継承性 generativity」の感覚を確立することで死の不安に対処することを経て、老年期には、死に対する自我の関心が最小になっているはずであり、死をライフスパンの当然の帰結と見なさなければならないという（Newman & Newman 1987：543-44）。

では老年期にあって、人はどのように死と向き合う意味を見出していくのであろうか。

3-2. 老年期に於ける死の意味

生涯発達研究者、特に Erikson、Newman、Levinson らは老年期に於ける人生の受容とともに、死と向き合うことの重要性を述べている。即ち老年期とは、個人が、生涯の究極的な試練に立たされる時期、言い換えれば、人間存在が自ら一人でこえねばならない死の谷の入り口に立たされている時期であり（Erikson, 1964：133/1971：131）、この段階での最終結合に於いて、死はその痛みを失うという（Erikson, 1950：232/1977：346）。つまり老年期に於いて大切なことは、死の

恐怖に囚われ絶望に陥ることなく、死が人生に於いて必然であるもの、つまり肯定的、否定的価値を付与せず、ただ自然の摂理として、勇気を持って受け入れることなのである。

Eriksonは、この死という境界線をもった人生に対する、冷静かつ活動的な関心という形をとってくる、「知恵 wisdom」を強調している。それは、死に直面しながらも、生そのものへ執着のない関心をもつことで、身体的な衰弱や知的機能の衰えにも拘らず、統合された経験を維持し、他に伝える努力である。また、後世への遺物を残す為、来るべき世代への要求に答え、しかも残すべき、全ての知識が絶対のものではないことを自覚していることである (Erikson 1964 : 133/1971 : 132)。つまり、人間存在はその死後にも生き延びるものを包含しており、その態度は個の内に完結することなく、循環するものであるといえる。

即ち我々は、死という究極的な現実を考慮しながらも、人生の意味を見出すという心理社会的成長に於ける頂点、つまり統合の達成により、若い世代に対し、それぞれの人生段階での挑戦を促す示唆を与える (Newman & Newman 1987 : 555-56)。これを Erikson は以下のように述べている。

可能性、実践力、適応力は、低下していくが、張のある心が責任ある諦観の才と結びつけば、老人のうちには、人間存在の問題をその全てにわたって直視することができるであろうし (これこそ「人格的統合 integrity」の意味するところである)、次代への1つの人生の「終幕」の生きた実例を示すことができるであろう。(Erikson, 1964 : 133-34/1971 : 132)

彼らは更に60歳以上を一纏めにし、一つの発達段階とすることは単純すぎるとして、老年後期あるいは晩年期に於ける死の実存的意味について言及している。

つまり80歳以上まで長生きしている殆どの人が少なくとも慢性の病気を抱えており、成長の徴よりも老化現象が顕著となってくるこのライフサイ

クルのまさしく終局に於いて発達の意味するものは、死への道のりに慣れ、死を覚悟を持って迎えることである (Levinson 1978 : 38-9/1992 : 80-2)。この失調要素の絶望が常に傍らにある時期に於いて、人は自らの死後も生き延びる何かを見つけ、不死の感覚を手に入れることが必要である。即ち、この連続性の感覚は5つの方略、つまり、子どもや孫に生きること、あの世あるいは霊的な水準を信じること、創造的偉業を通して他者に明白な影響を与えること、自然の連鎖に融和することになること、そして経験的超越の感覚を成就することを通じて養うことが可能となる (Newman & Newman 1987 : 587-91)。

この時期になると老年前期に於ける生、即ち回想的な評価を含んだ生とは異なり、一日一日を無事に過ごすことが出来るかということ、つまり現存在の哲学を成就させることが重要となってこよう。つまり、失調要素を甘受することにより、物理的あるいは合理的視点、また個人の時間性を超越したところに意味を見出すことが必要となってくる。Reker & Chamberlain (1999b : 201-2) は、この「老年的超越性 gerotranscendence」こそ、実存的意味の理論的説明を構築する為の可能性を有した現存の発達の理論であると述べている。つまり、エイジングの観想的次元として、老年的超越性の理論は、それが実存的意味の生成の過程を容易く取り入れることが出来る範囲 (変態や超越のような範囲) に於いて、全く十分であり、老年的超越性は生涯発達心理学の包括的理論として、特にそれが人生の後年に当てられるものとしての根拠を表すとしている。

纏めると、死に身近に関わる存在である高齢者に対する発達理論は、老年前期、および晩年期 (あるいは老年後期) の何れに於いても、死との向き合いが最重要課題であるとしながらも、その取り組み、即ち死の意味の源泉が異なることを描いている。ただどちらの段階に於いても、死の足音に恐怖し、絶望に陥ることなく、残された人生を生きる為には、自らの人生を意味あるものとし

で繋ぎ合せ、他者にとってもそれが意味あるものであったとすることが必要となる。言い換えると、自己の連続性と一貫性の感覚と自らの時間を越えた時間との連続性を得ることが、死のなかに実存的意味を見出すことのできる必須条件であるといえよう。

3-3. 生涯発達のアプローチの問題点

このように、人生生涯、特に老年期に於ける死の意味に対する生涯発達のアプローチは、変化する個人の意味体系の感覚を包括的に捉えることが可能である一方、このアプローチに対する幾つかの困難も指摘されている。

それはまず、歴史や社会文化的条件の重要性を謳いながらも、それを十分に扱っていないとも言える点である。しかしながら、死の意味は解釈学的意味に於いても、実存的意味に於いても文化や歴史の制約を免れず、宗教や哲学的体系などのイデオロギーの影響を受けており、社会や文化の成員として皆が手にするものは、目的地や目標としてだけでなく、一連の認知的カテゴリーと枠組みである (Dittmann-Kohli & Westerhof 1999 : 107)。即ち、死という実存的意味は、個人的であると同時に社会的である (Kenyon 1999 : 9)。

更に、人は自己自身に対する目的物でないように、人の死も自身に表すことは出来ない。即ち、我々はいつか死ぬことを知ってはいるが、それを予期することも自己の死がどのようなものであるかを知ることが出来ないのである (Kenyon 1999 : 14-5)。従って、意味は生物学的時間に於いて理解されるのではなく、常に生成の途上にあるものである為、ライフコースの研究は必然的に、質問に対する歴史的形態、即ち自己がどのような歴史性を有しているか、だけでなくナラティブ構造、即ち現在という地平より展望する過去と未来という時間軸、についての知識を要求するもの、つまり明確な意味では、語られる為の発達途上のストーリーであることの重要性を含むものでなければならない。その意味に於いて、Erikson の理論的研究にも拘らず、生涯発達の心理学は、回顧分析に陥ること

で人生生涯にわたる個人の連続性を描くことの困難性を有している (Polkinghorne 1988 : 115-6)。即ち、死の実存的意味の構造は、発達的变化のなかで捉えられるべきであるが、それは過去から現在へ、そして現在から未来へという、単なる一方向的発達としてではなく、常時書き換えられ、一生発達し続ける能動的なプロセスとして理解されるべきであろう。

4. ナラティブ・アプローチ

では死という実存的意味を、その豊かな含蓄を失わずに、人生生涯に於いて発達し、他者との関係性のなかで生成され、文化・歴史的文脈に依存したものとして捉えることが出来るアプローチはなんだろうか。つまり、実存主義的アプローチの意味の主体としての個人の強調とともに、それが社会的に構築されるものであるというパラドックスを包含し、その意味の構造もまた人生生涯という時間軸のなかで再構成されるものとして捉えることのできるアプローチは何か。この問いへの一つの回答として、ナラティブ・アプローチを提示したい。

即ちナラティブ・アプローチは、個人的な経験と、ディスコースなどの社会的形式の間に横たわる、解決不可能な相互の関連性へのアプローチである (Crossley 2000 : 39-43)。言い換えると、構造に囚われることで個人の主体性を見失うことなく、且つ、個人の内面に目を向けすぎること、社会性を見失うことのないアプローチであるといえる。

更に、ナラティブ・アプローチは意味と発達の視点の重視とともに、言葉を重視する。事実、Sarbin (1986 : 12/1991 : 179) は、人間は限られた認識能力と言語能力とで世界を意味づけようとするものであるが、経験した出来事の間に確固たる結びつきがない場合、各個人は、うまく筋の通っているかの検証に耐える、想像力を働かせた明確な表現へとそれらの出来事を組織化してゆくと述べている。即ち、人間の意識性に対する独特な意味の秩序の特徴を掴む要は、言語、つまり経

験を意味に満ちたものにする一つの乗り物、の理解であるといえよう (Crossley 2000: 10)。

そして、その人間存在の基本的次元は時間性であり、人々は彼らの人生に対する説明と解釈の為に自己のストーリーを用いることで、ナラティブは単なる時間の移行から意味に満ちた統合体、即ち自己へと変換する。従って、彼の人生生涯に対する個人の経験についての研究は、ナラティブの形態の操作とそのライフストーリーが他のストーリーとどのように結びついているかに随行することを要求するのである (Polkinghorne 1988: 119)。

また一方で、人間存在として我々の経験は、最小の投企から全ての「人生の一貫性」にわたり、如何なる水準に於いても「脅威を及ぼし」、差し迫ってくる混沌に直面するなかで、我々が常に一貫性と意味の秩序を保とうともがき続けるなかに存在するものである (Carr 1986: 91)。即ち、前述のように、生死を強く意識する転機、つまり我々の根源的価値を崩壊させるトラウマ的な出来事への遭遇は、その一貫性と秩序を揺るがし、それまでの世界との断絶を招きその反応として新たな意味の秩序を保つナラティブへの志向性が発生させる。つまり、(やまだ 2000: 85)が述べているように、それは自己と他者や、前の出来事と後の出来事との深い断絶を経験した際に顕著になるものであり、その意味に於いて死の実存的意味はナラティブ・アプローチによりより鮮やかに描き出すことが可能であろう。

繰り返すならば、この人生の語られた本質とナラティブの使用は実存的意味の研究に価値をもつものである。事実、実存的意味は経験的で、構成的で、そして言語的に接近できる為に、このアプローチは、実存的意味の知見を実質的に拡張し、この分野を開拓する特有の根拠を持つといえよう (Reker & Chamberlain 1999b: 203)。

5. まとめ

以上により、死の実存的意味を捉えようとした場合、つまり我々がその経験の実存的次元を明らかにしようとする場合、人々がその状況、つまり

死と向き合っている状況に於いてそれをやりくりし、合理化する為に用いるナラティブを探索しなければならないといえる。言い換えるならば、死という人間にとって最も根源的で実存的な問題は、ナラティブ・アプローチによってより包括的に捉えることが出来るだろう。

謝辞

ご多忙中にも拘わらず、適切な指導とご助言を頂きました、やまだようこ教授には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Coward, D. D. (1999). Making Meaning Within the Experience of Life-Threatening Illness. In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.), *Exploring Existential Meaning* (pp.157-170). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Crossley, M. L. (1997). "Survivors" and "Victims": Long-term HIV Positive Individual and the Ethos of Self-Empowerment. *Social Science & Medicine*. **45** (12), 1863-73.
- Crossley, M. L. (1998). Women living with a long-term HIV positive diagnosis: problems, concerns and ways of ascribing meaning. *Women's Studies International Forum*. **21** (5), 521-533.
- Crossley, M. L. (1999). Stories of illness and trauma survival: liberation or repression? *Social Science & Medicine*. **48**, 1685-1695
- Crossley, M. L. (2000). *Introducing narrative psychology: self, trauma and the construction of meaning*. Buckingham, Philadelphia: Open University Press.
- Dittmann-Kohli, F., & Westerhof, G. J. (1999). The Personal Meaning System in a Life-Span Perspective. In R. Josselson, & A. Lieblich (Eds.), *The Narrative Study of Lives* (pp.107-122). Newbury Park, London, New

- Delhi: Sage Publications.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company, Inc. (Erikson, E. H. (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2. (仁科弥生, 訳). 東京: みすず書房)。
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton & Company Inc. (Erikson, E. H. (1971). 洞察と責任: 精神分析の臨床と倫理. (鑑幹八郎, 訳) 東京: 誠信書房)。
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M. (1997). *The Life Cycle Completed: A Review Expanded Edition*. New York: W. W. Norton & Company Inc. (Erikson, E. H., & Erikson, J. M. ライフサイクル、その完結 <増補版>. (村瀬孝雄・近藤邦夫, 訳). 東京: みすず書房)。
- Josselson, R. (1993). A Narrative Introduction. In R. Josselson, & A. Lieblich (Eds.). *The Narrative Study of Lives* (pp. ix-xv). Newbury Park, London, New Delhi: Sage Publications.
- Kenyon, G. M. (1999). Philosophical Foundations of Existential Meaning In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp.7-22). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of man's life*. New York: Ballantine Books. (Levinson, D. L. (1992). ライフサイクルの心理学 上・下. (南博, 訳). 東京: 講談社学術文庫)。
- Newman, B. M., & Newman, P. R. (1987). *Development Through Life: A Psychological Approach, 4th Edition*. Chicago, Illinois: The Dorsey Press.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative Knowing and Human Sciences*. New York: State University of New York Press.
- Ranst, N. V., & Marcoen, A. (1999). Structural Components of Personal Meaning in Life and Their Relationship With Death Attitude and Coping Mechanisms in Late Adulthood In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp.59-74). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Reker, G. T., & Chamberlain, K. (1999a). Introduction. In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp. 1-4). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Reker, G. T., & Chamberlain, K. (1999b). Existential Meaning: Reflections and Directions. In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp. 199-209). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Sarbin, T. R. (1986). The narrative as root metaphor for psychology. In T. R. Sarbin (Ed.). *Narrative psychology: The Storied Nature of Human Conduct*. (pp. 3-21). New York: Praeger. (Sarbin, T. R. (1991). 心理学の根源的メタファーとしての語り. 現代のエスプリ. 286, 169-187.
- やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学. やまだようこ(編). 人生を物語る: 生成のライフストーリー, 1-38. 京都: ミネルヴァ書房.

(修士課程)